

Editorial

がん遺伝子パネル検査がついに始まりました。以前の特集予告を見ていた読者であればお気づきかもしれませんが、今回の角南久仁子先生による特別企画「はじめてのがん遺伝子パネル検査 特別講義」は、実はひとつ前の春号に掲載の予定でした。というのも、当時入手していた情報の限りでは、「保険承認は2月が確実。春刊行なら、最高のタイミング!」というわけで春号掲載と意気込んでいましたが、こちらのもくろみ通りにはいかないのが世の常……。5月末の中央社会保険医療協議会にて承認となりました。しかし、そのおかげもあって、今号は非常に面白い組み合わせになったのでは、と思っています。

特集で紹介したGATE frameは、臨床試験を視覚的な情報に置き換えることで、その理解を促すツールです。初見時にまず脳裏をよぎったことは、「患者にとって画期的だ!」という思いでした。取り上げた国内標準治療レジメンの根拠となっている論文は、どちらの治療がどの点に効果があり、どのように優れているか、ということを見極めるためのphaseⅢ trialです。原稿を読んでいるとき、かつての化学療法がどう成り立ってきたか、phaseⅢにいたるまでの苦労の道のりが、RAMBOMANの背後に文字通り透けて見えました。その道程たるや凄まじいものがあります。あえて文字情報をそぎ落とし、視覚的に簡略化されたように見えるGATE frameは、残された数字の存在感によって、がんの治療に挑み続けた歴史とそこに関わった人々を、あらためて強く実感させます。そういった意味でも画期的なツールです。

同時並行で制作を進めていた、特別企画のがん遺伝子パネル検査の原稿を読んでいくと、GATE frameで感じた歴史の重みとは違ったものがそこにあることに気づかされます。5年後にはliquidでの検査が可能とも言われています。血液採取だけでがん遺伝子のパネル検査ができる未来はどうやらすぐそこにあるようです。そんな遺伝子検査が日常化した現場から生み出される臨床研究をどのように読んでいくのか。GATE frameというツールは、phaseⅢ論文が還元される臨床現場で行なわれる「論文の読み解きかた」について、なにかしらの示唆を与えてくれるように思います。

最後に今回の2つの企画が実現にいたるまでの道のりを

少し紹介します。GATE frameを知ったのは、企画者である清水先生との別件での打ち合わせの席でした。「こんなものがあります」と見せていただいたとき、なんの因果か毎日レジメンを読み、新薬承認と聞けばその論文を読み、という仕事をしなくてはならなくなった私自身が、「これが欲しかった!」と感動したツールでした(もう2年近く前になるでしょうか……)。それ以来、相原守夫先生のホームページを導き手になんとか実現する手だてを考え、日頃からお世話になっている勝俣範之先生と相原先生が旧知の間という縁に助けられ、ようやく目の見るのがかきました。ここまでの道のりに辛抱強く付き合っていたいただいた、清水久範先生、そしてレジメンの選定と企画立案に大きな協力をいただいた野村久祥先生と鈴木賢一先生にはあらためての感謝を申し上げます。

「がん遺伝子パネル検査が始まると臨床は大変になる」ということを方々から聞き、なんとかしなくては気持ちばかりが焦っていたときに、2017年の医学界新聞での座談会、「ゲノム医療を日常診療へ」を思い出しました(弊社HPより無料で読めます)。この座談会ではHBOCの話をとっかかりに、ゲノム医療の臨床実装を考えることが大きなテーマでしたが、座談会に出席いただいた角南先生にすぐに連絡を取り、企画の構成から執筆者のラインアップ、全体のコンセプトに至るまでほぼ全てを構案いただきました。このテーマについて、臨床の読者へ向けたものとしては、「これ以上のものは現時点ではない」と断言できる内容です。ご執筆いただいたのは、山本先生はじめ実際のNCCオンコパネルの開発に直接関わった方で、更には同じく同時承認となった中外製薬株式会社からもFoundationOne[®]についても充実の記事をいただきました。深く感謝申し上げます。

7月に入り各地でエキスパートパネルの模擬パネルや講習会などが始まっていると側聞します。がん遺伝子パネル検査については、今回のものをベースに、臨床現場での運用上での問題や、臨床家が感じた悩みに応えるものも続けて企画したいと考えています。一読後、感想や要望をお伝えいただければ、そのまま実現していきたいです。ぜひとも、よろしくお願いいたします。

「Cancer Board Square」編集室 三橋